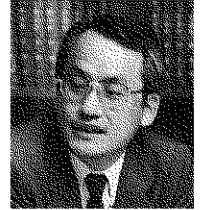


地球環境問題

早稲田大学理工学部教授

一ノ瀬 昇



5～6月ともなると大学では就職関係の仕事が増えてくる。今年は平成景気とやらで、鉄鋼をはじめ従来不況であった業種も景気が回復し、学生にとっては求人側の要求も多くなり過去に例がない売手市場の年になりそうである。

筆者は今年が就職担当の当り番ということになり、すでに150社近くの企業の方々にお目にかかり、400社以上の会社案内を読ませて頂いた。また、これに先立って3月には20名近くの学生をつれて、関東地区、関西地区の各企業を1週間ずつ訪問もさせてもらっている。

これらの活動を通じて気になった点がいくつかあるので本論に入る前に触れておきたい。まず、各社を訪問させて頂いて一番気になったのは、当学科が材料工学科なので訪問先も自動車、鉄鋼、金属、石油化学、エレクトロニクス、コンピュータ、電子部品、原料素材など幅広い分野の企業を選んだが、研究所はいずれも最近新築されたもので、高価な評価設備、製造設備があり、クリーンルーム

を備えており、学生に気に入ってもらうためにそういった所を見せるのであろうが、どの研究所もユニークさがなく同じような設備で、研究内容も新素材とか機能性薄膜とかいったものであり、差別化ができていないという点である。これでは学生の方もとまどってしまうのではなかろうか。次に製造業離れの問題も大きな話題となっているが、給料が低いとかいくつかの問題点はあるが、やはり根本的には魅力が足りなくなっていることは事実であろう。製造業の一層の奮起を期待したいものである。

さて、21世紀に向って、個々の企業は将来の発展のため、革新的な研究を目指すのは当然であり、上述のように各社似たりよったりの研究分野になってしまうのかも知れないが、投資という面からみたらあまり賛成できない面も多い。最近では、フロン問題をはじめ全地球的な環境問題が話題となっている。新素材、新材料も結構であるが、全地球的環境問題を無視しては通り過ぎることはできなくなっている。

日本は現在経済大国とか言って浮かれているが、今後は地球規模の課題にもっと目を向けなければならない時期にきているのではなかろうか。これからの日本にはグローバルな時代にふさわしい発想と行動が必要になってこよう。地球規模の課題ともなれば一企業の研究テーマというわけにはゆかないであろうから、国としても、国際貢献の立場から、地球規模の国際共同研究計画も支援すべきであろう。これら国際共同研究に各企業の研究所も参画できるような体制を国としても検討してもらいたいものである。

幸い、本フォーラムに関係あるニューグラス製品はこのような環境問題と今のところ直接関係ないようであるが、夢々忘れてはなるまい。本フォーラムには百数十社の企業が参画されているが、近い将来産業動向調査ばかりでなく、地球環境問題の調査なども共同で実施してもらいたいと思う。そして、それらの調査を通してニューグラスフォーラムとしても国際的なレベルで共同研究が必要と認めたら、積極的に提言してもらいたいものである。

冒頭に、現在の日本の企業の研究は似たりよったりであり魅力が少ないと述べたが、上記のような地球規模での国際共同研究にも多大な貢献をすることにより、研究活動を活性化することができるのではなかろうか。その時、製造業離れをしている理工系学生も戻ってくるのではないかと愚考している昨今である。

